

国際交流委員会 企画シンポジウム

6月20日(日) 9:00~10:30

新型コロナウイルスの時代における遠隔医療(Telemedicine)の運用

Telemedicine in the Age of the COVID-19 Pandemic

企画責任者: 及川 欧

総合司会: 及川 欧

■ 話題提供者

Igor Malinovsky¹⁾、渡邊健太郎²⁾、及川欧³⁾

- 1) New York State Psychiatric Institute/Columbia University Medical Center
- 2) 国立極地研究所 国際・研究企画室
- 3) 旭川医科大学病院リハビリテーション科

■ 概要

令和初期の代名詞になりつつある新型コロナウイルス禍は、我々の日常生活における「人との接し方」を考え直す機会を与えてくれた。本シンポジウムは、国際交流委員会の自主シンポジウムとして企画されたが、3名それぞれの立場から遠隔医療(Telemedicine)について話題提供を行う。Malinovsky氏は米国ニューヨーク州で初発精神病の若者(16歳から30歳)を対象に行われている ontrackny というシステムに参画している心理学者である。人との接触を避け、家に引きこもりがちな若者とのオンラインのカウンセリング等が有効活用されている現状について報告する。渡邊氏は長年、南極地域観測における海洋生態学の研究をされており、現在は国際・研究企画室の特任教授。60年以上も続く南極観測では、医療や他分野について国内からどのようにリモートなサポートを行っているのかについて報告する。及川氏は最近NHKでも放映された、冷え症に対する“スー・ハー”リラックス法で用いている遠隔バイオフィードバック法と、マスコミを利用した情報の拡散法の可能性について報告する。

広報企画委員会 企画シンポジウム

6月20日(日)13:00~15:00

バーチャルリアリティによるオンライン・バイオフィードバックの試み

企画責任者:中尾睦宏(国際医療福祉大学), 竹林直紀(ナチュラル心療内科)

司会:志和資朗(広島修道大学), 辻下守弘(奈良学園大学)

■ 話題提供者

- 1) 中尾睦宏 (国際医療福祉大学)
「本シンポジウム企画の意図と自験例の紹介」
- 2) 野田昇太 (武蔵野大学), 宮本琳太郎 (株式会社ビジョナリー・デジタル・セラピューティクス), 牛場貴則 (株式会社ビジョナリー・デジタル・セラピューティクス), 中尾睦宏 (上記)
「社交不安症などを対象とした VR・AI を活用した認知行動療法プログラムの試み」
- 3) 竹林直紀 (上記)
「クリニックでのオンライン診療&バイオフィードバックの可能性」
- 4) 大須賀美恵子 (大阪工業大学)
「VR と低負担生体計測の BF・メンタルケアへの応用可能性」

■ 概要

新型コロナウイルス感染症の世界的流行により、私たちの日常生活は劇的に変化した。バイオフィードバックの実践においても、対面の場合はマスク着用や手指清潔を保つなど感染予防対策はこれまで以上に求められるようになった。そういった状況下で、人工知能 (AI)、情報通信技術 (ICT)、人工現実感・仮想現実 (VR)などの最新テクノロジーを活用してのバイオフィードバックが注目されている。例えばではあるが、在宅ワークや巣ごもり傾向が高まる中、外出恐怖や登校・出勤困難などのメンタルヘルス問題を抱えている方に対して、在宅しながら VR による社会訓練を実施し、医療機関とは遠隔診療で治療を進める方法などが可能性として考えられる。本シンポジウムでは、バーチャルリアリティなどによるオンライン・バイオフィードバックの現状や将来ビジョンについて、企画広報委員会メンバーを中心に、自由闊達な議論を進めていきたい。